

# ひとりごと

## ひとり旅の効能

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」

あまりにも有名で、解説をはさむ余地などあろうはずもない客愁深いこの一節。誰もが一度は不意に口走ったことがあるのではないだろうか。ひとり旅を一番の生きがいとしている私は、いつもこの一節を心に携えて旅に出る。

何時間も誰とも会おうこともなく、ただひたすら行進し続けた深き山中の四国遍路道、大噴煙をあげる桜島にパニックになる自分を横目に平然として見向きもしない薩摩の人々、たまたま雑魚寝部屋で隣になった青年と語り明かした夜行フェリー、日本一長い路線バス（6時間耐久）を完乗して腰から崩れ落ちた30歳の夏。思い返せば枚挙にいとまがない。旅はいつだって未知との遭遇をもたらしてくれるのだ。

そういえば先日、同僚から素朴な疑問を投げかけられた。

「何でひとり旅するの？ひとり旅をする意味は？」と。あまり深く考えたことがなかった私は返答に窮し、当たり障りのない返しをしてその場をやり過ごした。

後日、無性にその問いに対する自分なりの確かな答えが欲しくなり、多摩川の河川敷でぼんやりと考えた。

20代前半の頃、飲食店や映画館にひとりで行くことすらためらっていた時期があった。ひとりで寂しい奴だと思われやしないだろうか？と、常に周囲の反応ばかり気にしていたのだ。誰かが一緒にいれば平気なことも、いざひとりになると、何もできない自分いることに気づき、自分に自分の弱さを見透かされた感覚に陥ったことがある。

集団の中にいる自分は、あんなにも生き生きとしているのに、自分がありのままの無添加な単体になったときの無力さたるや……。これではいかんと主体的に行動する機会を求めて駆り出したのがひとり旅のルーツだったであろうか。ひとり旅に高尚な意味なんてないと思うけども、何かしらの意味を持たせるならば、「主体的に生きる」を具現化するためのひとつの方途なのだと思う。

ひとり旅は全てを自分ひとりで決めて行動しなければならない。否応もなく主体的に行動をせざるを得ない環境に身を置くことになるので、不安感と緊張感が入り混じった濃密な時間を過ごすことになる。

そんなひとり旅を終えたとき、ひとりであれができた！これができた！こんな出来事に会えた！と、得も言われぬ高揚感のなかで立ち往生してしまうことがある。気持ちの落ち着きどころを探しているうちに湧き上がってくる心の充足感は何ものにも代えがたく、それがまた次のひとり旅へとかき立てるのだろうか。さて、明日はどこへ行こうか。

(S.M)